

2018年12月20日／浪宏友ビジネス縁起観塾

本来の自分

1. 概要

(1) 資料

庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社

(2) 主題

今回は、「仏性」について学び、本来の自分について考えてみたいと思います。

2. 衣裏繫珠の譬え

法華七喩のひとつ「衣裏繫珠の譬え」を読みたいと思います。

この譬えは、釈迦牟尼世尊から「かならず仏の境地にたっするであろう」と、成仏の保証を与えられた五百人の弟子たちを代表して、憍陳如(きょうじんによ)が述べたものです。

〔宝石を着物の裏に縫い付ける〕

「ある貧乏な人が、親友をたよってやってきました。親友は酒さかなをだして手厚くもてなしてくれましたので、その人はすっかり酔っぱらい、いつのまにか眠ってしまいました。

ところが、その親友は、急に公用で出かけなければならなくなりました。寝ている友だちを起こすのも気の毒だとおもい、その人のために、はかりしれないほどの値うちのある宝石を着物の裏に縫いつけておいて出かけたのです」(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 87)

〔あいかわらずの貧乏ぐらし〕

「目がさめたその人は、親友が長い出張に出かけたと知り、しかたなく立ち去りましたが、あいかわらずの貧乏ぐらしで、ついに放浪の生活にはいりました。そして、衣食のためにたいへんな苦勞をし、ほんのすこしでも収入があれば、それで満足するという状態でした」(同書、p. 87)

〔着物の裏から宝石を取り出す〕

「ずいぶんたってから、その人は、むかしの親友と道でバッタリ出会いました。親友はあいもかわらぬそのあわれなすがたを見て、『なんという愚かなことだ。わたしは君が安楽に暮らせるようにとおもって、着物の裏に高価な宝石を縫いつけておいたのに』といいます。

そして、あっけにとられている友だちの垢じみた衿の裏からその宝石をとりだしてやり、『さあ、これを売って、なんでも必要なものを買いなさい。なに不足ない生活ができるよ』というのでした」(同書、p. 88)

3. 橋陳如の反省

橋陳如は、続けて、この譬えに込めた思いを述べました。

〔仏性を自覚できなかった〕

「仏さまも、この親友のようなお方でございます。仏さまがまだ菩薩であられたころ、わたくしたちに『だれにも一様に仏性（はかりしれぬ値うちのある宝石）がそなわっているのだから、修行して仏の悟りをひらくように……』と教えてくださったのですが、私たちの心は眠りこけていて、その真意をつかむことができませんでした」（同書、p. 88）

〔煩惱を除いただけで満足する〕

「そして、ただ煩惱を除くことができただけで、それを悟りだとおもいこんでいました。しかし、心の底にはほんとうの仏の悟りを求める心が残っていたのでございましょう。なんとなく、もの足りない感じはいたしておりました」（同書、p. 88~89）

〔菩薩の自覚〕

「いま、世尊は、わたくしどもの目をハッキリ覚まさせてくださいました。いまこそわたくしどもは、菩薩です。これから菩薩としての修行を積み世の人のためにつくしていけば、ついには仏になれるのだということがわかりました。こんなありがたいことはございません」（同書、p. 89）

4. 「衣裏繫珠の譬え」の考察

(1) 親友の家を訪ねる

「ある貧乏な人が、親友をたよってやってきた」とあります。

「貧乏な人」とは、その日暮らしの人でありましょう。自分を錯誤し、渴愛を生じている人は、目の前の現象に振り回されて、苦悩の日々を過ごしています。まさしく、その日暮らしなのです。

親友とは仏です。「親友をたよってやってきた」とは、救いを求めて仏のもとにやってきたということだと思えます。

(2) 酔い臥す

「親友は酒さかなをだして手厚くもてなしてくれました」とあります。救いを求めてやってきた人に教えを説いて、苦悩から救ってあげたのでありましょう。

「その人はすっかり酔っぱらい、いつのまにか眠ってしまいました」とあります。苦悩から救われて満足しているのです。

(3) 宝石を着物の裏に縫いつける

酔い臥している人の着物の裏に、親友が、はかりしれないほどの値うちのある宝石を縫いつけたとあります。

「はかりしれないほどの値うちのある宝石」とは、もちろん「仏性」です。

心の安らぎを得た人々に、仏は、「だれにも一様に仏性がそなわっているのだから、修行して仏の悟りをひらくように……」と教えてくださいました。ところが、橋陳如たちは、その真意をつかむことができませんでした。

橋陳如たちは、心の安らぎを得たことで、修行は完成したと思ってしまったのです。

(4) 貧乏ぐらし

この人は、「あいかわらずの貧乏ぐらしで、ついに放浪の生活にはいりました」とあります。貧乏ぐらしとは、煩惱の生活を続けていることを言っているのでしょうか。

(5) 放浪の生活

「放浪の生活」とありますが、これは抛りどころが確立しないことを言っていると思われます。仏道修行者の抛りどころは「自燈明・法燈明」です。仏性を自覚せず、久遠本仏に生かされていることを悟れないために、真の自燈明・法燈明には至っていないということでありましょう。

(6) ほんの少しの収入

「ほんの少しの収入でもあればそれで満足する」とあります。

「ほんの少しの収入」とは、煩惱をのぞくことができ、心の安らぎを得たことでしょうか。

仏性で生きる境地に比べれば、煩惱を除いた境地は、「ほんの少しの収入」にすぎないのです。

(7) 仏の悟りを求める心

橋陳如の言葉の中に、「しかし、心の底にはほんとうの仏の悟りを求める心が残っていたのでございましょう。なんとなく、もの足りない感じはいたしておりました」とあります。

人間には、仏性がありますから、たとえ迷いの人生を送っていても、心の底には仏に対するあこがれが、多少なりとも脈打っているのです。

まして、橋陳如のように修行を重ねた人なら、そのようなあこがれの心が、強くはたらくでありましょう。

(8) 親友とバツタリ出会う

「昔の親友と道でバツタリ出会った」とあります。

心に安らぎを得た橋陳如たちが、釈迦牟尼世尊が説く「人間の本質は仏性だよ」という教えに、初めて心が向いたということだと思えます。

(9) 着物の裏から宝石を取り出す

親友が、垢じみた衿の裏からその宝石を取り出してやったとありますが、これは、橋陳如が、ようやく自分の本質は仏性なのだと自覚することができたことを示しているのでしょうか。橋陳如は、「世尊は、わたくしどもの目をハッキリ覚まさせてくださいました」と、申し上げました。

これから菩薩としての修行を積んでいけば、やがて仏の境地にいたることができる、はっきり理解できたのです。

5. 人間の本质

(1) 仏性

庭野日敬師は、「仏性」について、次のように解説しています。

「仏性には〈仏になりうる可能性〉という意味と、〈仏そのもの〉という意味とがあります。前者は、どのような人であっても努力次第で、いつかは必ず仏となることができるということで、仏性ということを経行という面からとらえた意味です。

後者は、すべての人の本質は仏の本性そのものであるということで、仏性ということを経行の本質からとらえた意味です」（同書、p.89～90）

(2) 「仏になりうる可能性」について

① 妙法蓮華経では、釈迦牟尼世尊が弟子たちに向かって、「あなた方は必ず仏の境地にたつるでしょう」と説いています。そして、舍利弗以下の修行者たちひとり一人に、仏になれるという保証を与えています。

② 妙法蓮華経法師品に次の一節があります。

「もしわたし(釈迦牟尼世尊)が説く、妙法華経の一偈一句でも聞いて、一瞬のあいだでも『ああ、ありがたい』と心から思うものがあつたら、わたしはその人に成仏の保証を授けましょう。その人は、かならず仏の悟りを得るにちがいないからです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.98）

③ 阿含経には、釈迦牟尼世尊の教えを受けた弟子たちが、阿羅漢の境地に入ったことが数多く説かれています。阿羅漢とは、仏陀となられた釈迦牟尼世尊と同等の境地です。すなわち、修行次第で、釈迦牟尼世尊と同じ境地に入ることができるのです。

(3) 「仏そのもの」について

① 「仏そのもの」であるとは、「すべての人の本質は仏の本性そのものである」ということです。

② 如来寿量品には、仏の寿命は不生不滅であることが説かれています。この仏を「久遠本仏」といいます。人間をはじめとするあらゆる存在は、久遠本仏に生かされている、いわば仏の実子なのです。

③ 「仏性」とは「仏の性質」で、この場合の「仏」とは「久遠本仏」です。久遠本仏に生かされている私たちは、久遠本仏の性質を持っているのです。

久遠本仏は、あらゆるものを生かすはたらきをしています。私たちにも、あらゆるものを生かすはたらきができる性質があるのです。

6. 仏性を自覚できない

(1) 凡夫のすがた

庭野日敬師は、次のように解説しています。

「われわれは、みんな、こういう意味の仏性を持っているのですが、なかなかそれを自覚できません。なぜかといえば、『衣食に追われてあくせく働き、欲望を追って右往左往しているこの身、この心が自分なのだ』と、すっかりおもいこんでいるからです。この話のなかの貧乏な人が、そういったわれわれ凡夫のすがたなのです」（同書、p.90）

(2) 自分に対する錯誤

ここに「『衣食に追われてあくせく働き、欲望を追って右往左往しているこの身、この心が自分なのだ』と、すっかりおもいこんでいる」とあります。

これは、自分に対する錯誤です。阿含経では、これを「我（が）」と呼んでいます。

「自分には仏性がある」と自覚できない理由のひとつは、「自分に対する錯誤＝我（が）」があることです。

(3) 欲望の満足を追う

「金持ちの友人すなわち久遠の本仏は、どんな凡夫にも仏性という尊い宝石をちゃんとあたえてくださっているのに、われわれ凡夫は、欲望の満足のみを追い求めていますので、なかなかそれに気がつきません。それゆえ、いっこうに救われず、あくせくと苦の人生を送っているのです」（同書、p.90）

(4) 欲望中心の人生

「われわれ凡夫は、欲望の満足のみを追い求めています」とあります。「欲望（渴愛）の満足」を求めてものごとを見たり、考えたり、行ったりしているうちは、自分の仏性に気づくことができないのです。

7. 仏性に気づく

(1) お釈迦さまに教えられて

「ところが、この世にあらわれた仏であるお釈迦さまが、『すべての人間には平等な仏性がある（着物の裏に無価の宝珠をもっている）のだよ』と教えてくださって、はじめてわれわれはそれに気がつきました」（同書、p.90～91）

(2) 仏性に気づく

「自分に対する錯誤＝我（が）」の深まった私たちは、本来の自分に気づくことができません。「この世にあらわれた仏である釈迦牟尼世尊」に教えられて、はじめて、本来の自分である「仏性」に気づくことができるのです。

(3) 「仏性」に気づいた人

「それに気がついた瞬間、心がのびのびとなり、明るくなり、自由自在になり、これからさきの人生に大きな自信がついてきたのです」(同書、p. 91)

(4) 生き方が変わる

仏性に目覚めた人は、「錯誤した自分＝我(が)」と「渴愛」によって生きてきたこれまでとは、生き方がまったく変わります。これからは、本来の自分を生きるようになるのです。

8. すでに救われている

(1) 「衣裏繫珠の譬え」の真意

「つまり、この譬えには、『われわれは、ほんとうはすでに救われているのだ。われわれの本質は、久遠の本仏と一体の、自由自在な仏性なのだ。その事実を知らないために、苦の人生をさまよっているのだ。だから、救われるのは、なにもむずかしいことではない。自分の本質が仏性であること、つまり、はじめから救われているのだということを真に自覚しさえすればそれでいいのだ』という教えがのべられているわけです」(同書、p. 91)

(2) すでに救われている

「われわれは、ほんとうはすでに救われているのだ」とあります。私たちが迷っていようと、悟っていようと、久遠本仏は私たちを生かそう、生かそうと働いているのですから、すでに救われているのです。

それにもかかわらず、迷っている人は、久遠本仏の救いを知らず知らずのうちに拒絶して、苦悩の人生を歩んでいるのです。

9. 久遠本仏の救い

(1) 久遠本仏の救い

庭野日敬師は、久遠本仏の救いについて、次のように述べています。

「『本仏』はいつも天地の万物を救おう、救おうという精神をもって宇宙に遍満しておられるのです。『救う』といっても、網で魚をすくうように『救う』のではなく、人間なら人間、動物なら動物、植物なら植物、そのものもっている本来の生命を生き生きと発現させ、すくすくと伸ばしてやろうという『救い』なのです」(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p. 35)

(2) 本来の生命を生きる

庭野日敬師はさらに続けます。

「自分の生きかたの波長を『宇宙の真理』の波長に合わせさえすれば、たちまちそこに仏が現れるのです。すなわち、わたしどもの心や身体をおおっていた暗黒が消え去って、生き生きとした本来の生命の光が内から輝きだしてくるわけです」(同書、p. 35)

(3) 久遠本仏に身を任せる

常に私たちを救い続けている久遠本仏に身を任せれば、私たちは、救われつづけることができます。それが「生き生きとした本来の生命の光が内から輝きだしてくる」というすがたです。

このことを、庭野日敬師は、次のように述べています。

「もしわれわれが、いつも、『自分は久遠実成の本仏に生かされているのだ』という自覚を深くもち、『久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のおりに生きることが正しい生きかただ』という明快な真実を悟り、本仏のみ心にもとづいて説かれたお釈迦さまの教えにしたがって生きてゆきさえすれば、つねに大自信をもった生活ができ、人生苦などはあってもなきにひとしくなってしまうのです」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p. 169）

これこそ、妙法蓮華経における「信仰」の真髄であると、私は考えています。